

リージャ姫騎士団記

搾乳の砦

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET N



羽沢向一

表紙イラスト：舞猫ルル

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『リージャ姫騎士団記 搾乳の砦』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



リージャ姫騎士団記

搾乳の砦

羽沢向一

表紙 / 舞猫ルル

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アスクル

忘れられた神マームルの見習い司祭で、解呪の秘法を唯一使える人物。優秀な学者だが女性との経験が全くない。

リージャ

王家の血を引き、高貴で美しい通称姫騎士。魔軍の呪いで定期的に発情し母乳が出る体にされてしまった。

エルダ

リージャに忠誠をつくすことを喜びとしている副官。当然リージャと同じ発情噴乳の呪いを受けている。

軍用馬車は大いに揺れた。

アスクルは尻の下に敷いたクッションに感謝しながら、黒い司祭服の胸で揺れる真鍮製のペンダントを握りしめた。三重円の中心に黒曜石の玉をはめたデザインは、アスクルが司祭を務めるマムールの神のシンボルだ。

今にも馬車が壊れるのではないかという不安を、マムールの神への祈りを口ずさむことでまぎらわせていると、強い不審と奇異の視線を感じた。アスクルをとりかこんで座る四人の兵士たちが、異国の珍奇な虫を見る目を向けてくる。

祈りの言葉は、誰も使わない古語で綴られる。マムールはとうの昔に信者を失い、今や名を知る者すらほとんどいない神なのだ。

たくましい肉体を誇る兵士たちにかこまれて、揺れる座席にちよこんと腰かけるアスクルは、まるでしよぼくれた影法師のようだ。アスクルは司祭という地位にあるが、まだ若い。線の細い顔には、さらさらした黒い前髪がかぶさり、男にしては白い肌を強調している。顔や手の白さが、毎日小さな神殿の奥にこもって、太陽の下に出ることの少ない生活を物語った。

首から下は、靴の先まで黒い司祭服で被っているが、華奢な体格は隠せない。肩幅は狭く、手足は細長い。生まれてこのかた、一度も剣を握ったことはなく、弓を引いたこともない身体だ。

アスクールは詠唱を一区切りさせ、小さい声で、何度目かの同じ質問をした。

「あの、バザック砦はまだなんでしょうか」

「もうすぐだ」

何度目かの同じ答えが、対面に座る兵士たちの隊長からボソリと返ってくる。しかし馬車の進行方向には窓がないので、本当に目的地に近づいているのか、アスクールにはわからない。

見えるのは馬車の左右の小窓から覗く、荒涼たる岩山の風景だけだ。凸凹した道の左右には、鋭くとがった黒い岩がいくつも並び、鋸の歯か鯨の牙を思わせる。空は一日中黒雲が低く垂れこめ、今にもひとときわ高い岩の先に触れそうだ。太陽が見えず、朝からずっと夕方のように暗いおかげで、時刻もわからなかった。

ヨリア王国の都ディヨリアで生まれ育ったアスクールは、不気味だが雄大な自然の中で、いよいよ自分の卑小さを感じないではいられなかった。

五日前に出立した都とは大違いだ。戦勝祝いに沸くディヨリアはどこもかしこも華やかに飾られ、にぎやかな音楽が奏でられ、浮かれた人々の歌声や歓声が聞かれた。戦争は遠く離れたバザック砦の周辺で決して、王都自体にはなんの被害も出なかったことが、人々の祝祭気分をより盛り上げている。

アスクールが乗る馬車は、そのバザック砦へ向かっている。そこでヨリア国王バデム三世

7

陛下に反逆したジドー伯爵の軍勢は、王国軍に滅ぼされたのだ。

戦争大勝利、反逆の首謀者の戦死がディヨリアに伝わってから十六日後に、アスクルが師匠とともに住むマムールの神殿ということになっている古い家に、バデム三世の使いが訪れた。そうしてあれよあれよという間に、馬車に乗せられ、旅に出されたのだ。

自分はなんのために戦いが終わった戦場に連れていかれるのか、アスクルが何度質問しても、機密保持のためと教えてもらえなかった。

最後の質問から、どれほどの時間が過ぎたのか。

そろそろもう一度、同じ質問をしようか、とアスクルが思ったとき、いきなり馬車が停止した。

「到着した」

と、隊長がそっけなく告げて、馬車の扉を押し開けた。兵士たちの筋肉の壁に押し出されるように、アスクルはおぼつかない足取りで硬い地面に下りた。寒々とした風が、前髪と司祭服の裾をもてあそぶ。

馬車は黒い城壁のすぐ前に停まっていた。見るからに堅牢な石壁の向こうに、武骨一辺倒な建物の上部が突き出している。王都の美しさを優先した建物にはない、荒々しくすさんだ空気が砦全体を包んでいた。

「これがバザック砦……ですか」

砦の雰囲気におびえるアスクルの問いは、完全に無視された。隊長が自身の剣の柄で、城壁につけられた木製の大きな門を四度叩いた。反対側で待ち受けていたように、すぐに門がわずかに開き、隙間をすり抜けて、白い影が二つ、砦の中から現れる。

ともに純白のマントで全身を包んだ女だ。年齢は二十歳そこそこのところ。一人は背中に恐ろしく長大な剣を負った長い金髪の女。もうひとりには背に槍を負った短い銀髪の女だ。

白い女剣士は兵士たちを萎縮させる威圧感を放ちながらずかずかと歩き、若き司祭の前に立った。アスクルは口をポカンと空けて、自分よりも背の高い女の顔を見上げる。これほど鮮烈に美しさに輝く女を見たことがなかった。

女剣士の頭から金色の長い髪が滝となつてあふれ、白いマントの上をさらさらと流れて、背の中ほどまで落ちる。

黄金の清流に縁どられた顔は、天才彫刻家が精魂こめて彫りだしたような端正で、高貴な気品と誇り高い勇猛さをたたえている。やや太い眉の下で、深い紺碧の瞳が輝き、意志の強さを表していた。鼻筋は敵に挑むようにまっすぐに伸び、ふつくらした唇とともに、情熱的な印象を与えた。

アスクルが見惚れる唇が優雅に動き、他人に命令を下すことに慣れた声音を紡いだ。

「この者が、注文の男か」

直立不動を保っている隊長が、アスクルがはじめて聞くていねいでやわらかい声音で応じた。

「さようです、リージャ閣下」

その名前を聞いて、アスクルは胸のうちで叫んでいた。

（リージャ閣下だつて!? この人が、姫騎士団の姫將軍リージャ様なのか!）

ヨリア王国軍近衛特別騎士団の団長リージャ。その名はヨリア王国全土に鳴り響き、小さな幼児も憧れの思いをこめて口にする。王家の傍系の一員で、十六番目の王位継承権を持つ女貴族だが、男以上に剣技に優れ、若くして自ら結成した女だけの騎士団を率いている。国民からは、姫騎士団の姫將軍と呼ばれ、親しまれていた。

バザック砦で反乱軍を倒し、ジドー伯爵を討ち取ったのは、リージャと姫騎士団だ。その武勲は王都ディヨリアに伝わり、国民の人気はいよいよ高くなっている。本来なら王都に凱旋して、パレードでもするとところだが、ジドー軍の残党狩りのために配下の騎士団とともに戦地に残っていると、アスクルは聞いていた。

「確かにマムールの司祭を引き渡しました。自分たちはこれで失礼いたします」

隊長の言葉はていねいだが、すぐにもこの場を離れたいという願望がにじんでいる。リージャは兵士たちに解放の言葉を与えた。

「ごくろう。諸君らの任務は終わりだ」

兵士たちはすぐさま馬車に乗りこみ、御者が馬たちに鞭を当てて、もときた道を猛然と去っていった。

リージャの瞳がアスクールに戻ると、青い瞳に微笑が現れた。

「アスクール君、緊張することはないわ。わたしが誰だかわかるわね」
声も力強さを残したまま、柔和なものになる。

「はい。お会いできて光栄です、リージャ様」

「後ろにいるのは、わたしの副官のエルダよ。わが家に代々仕えている一族の娘で、わたしと同じ乳母に育てられた乳姉妹なのよ」

エルダは無言で前に出て、アスクルの左側に立った。並ぶと、リージャよりもわずかに背が低いが、やはり女としては長身だ。肩で切りそろえた銀色の髪は、リージャの黄金の髪と一対をなす美術工芸品に見えた。

瞳は深い緑色。鼻も唇も小さくひかえめで、落ち着いた知的な美しさを描いている。槍をふるって戦うよりも、学者として思索に耽っている姿が似合いそうだ。

二人の長身美女に挟まれたアスクールは、ますます緊張して、落ち着かない。

「あの、教えてください。ぼくはなぜ、バザック砦に連れてこられたのか」

リージャがマントの合わせ目から右手を出し、大門を押しながら告げた。

「きみがヨリア王国でただひとりの、若くて元気なマムールの司祭だからよ。忘れられた

古代の叡智を護るといふマムールの司祭にしか解決できない事態が、この城壁の中に存在しているのよ」

「それなら、ぼくよりも、ぼくの師であるケイオン様のほうが、知識も経験も豊富です」

「ケイオン師は老人だわ。アスクル君の若さが必要なのよ、はううっ！」

「リージャ様、しつかり、うっんん！」

わずかに開いた大門の前で、リージャとエルダがそろって膝をつき、マントに包んだ身体を丸くして喘ぎはじめる。アスクルはあわてて二人の顔を覗きこんだ。苦しげに引きつっていても、二人ともに美しさは損なわれない。

「リージャ様！ エルダ様！ どうされたのですか？ もしかして戦場で傷を負われたのですか？ マムールの司祭は医術も学んでいます。見せてください」

アスクルは喘ぐリージャの白いマントの裾をつかみ、一気にめくりあげた。

「あ、あああっ！」

この世のものとは思えないものが、若き司祭の前にあきらかになった。

リージャは腰から下に、身体にびったりと密着した白いタイツを穿き、白い靴を履いていた。伸縮性の強い布地は、たくましく高い尻や、むちむちと筋肉が張った太腿の輪郭を露骨に浮き出させている。それだけでも、毎日老師とともに古書ばかりを読み漁り、女とはまったく縁のない生活を送る少年の目には、充分にまぶしい肉体美だが、とにかく素肌

「は、はい。気合いが足りませんでした」

リージャがエルダを抱きしめる。優劣のつけられない美巨乳と艶豊乳が重なりあい、互いに押しあい、身体の外へ四つの乳肉があふれた。

「あああつ、エルダ、胸、とつてもいいわっ！」

「はううつ、リージャ様、乳首、気持ちいいですよ！」

勃起した乳首同士もからまり、女同士でなければ味わえない特別の乳悦を生みだす。がまんできず、主従は身体をゆすり、乳房をこすり合わせて、快楽を貪ってしまう。

胸だけでなく、二人の下半身も重なりあった。アスクルの勃起しつづける肉棒を呑んだリージャの女性器に、上から降りたエルダの肉唇がキスをする。

アスクルはためらうことなく両手でエルダの秘唇をつまみ、左右にくつろげた。

「んくっ！」

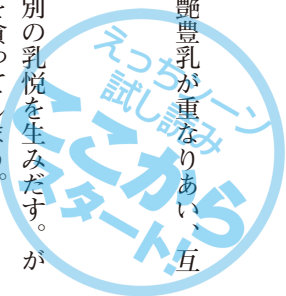
押さえた声とともに、重たげな尻全体がピクンと震える。尻たぶの表面を汗の玉がすべり落ちて、リージャの足のつけ根に滴った。

「エルダ様もきれいだ。女の人のここは、みんな輝いています」

「言わないで！ 恥ずかしすぎる！」

「ふあああつ！」

エルダの羞恥の叫びに、リージャのよがり声が重なった。アスクルが姫將軍の中から男



根を抜いたのだ。引きずられた膣口がまくれて、精液と破瓜の血液と愛液がまじってドプツとあふれ、石畳に複雑な色が塗られた。

「エルダ様、入れさせていただきます」

団長の血と愛蜜に濡れそぼった肉棒が、あらわにされたもうひとつの膣口へと押しつけられる。

「はあああつ、は、入ってくるううっ！」

閉じていた小さな穴が喜々として広がり、亀頭を受け入れた。

それでもきつい。リージャに負けず劣らず、エルダの処女孔は強烈に侵入者を締めつけて、アスクルの分身が蕩けるような快楽を与えてくれる。

「行きます！」

今度は遠慮しないで、ひと息に亀頭を奥まで打ちこんだ。処女膜は一瞬で破れて、生涯一度だけの鮮血が流れ落ちる。副官の血液が団長の肉花に滴り落ちて、開いた花卉を赤く染めた。

「あああ、本当です！ 痛くありません！ 処女膜を破られたのに、気持ちいいなんて！ あああ、なんと恐ろしい、はうううっ、いいっ！ たまらなひい！」

リージャが見つめる上で、エルダの顔がどろどろに蕩けてしまう。男の象徴で体内をえぐられ、かきまわされる歓喜に、涙がつきつきとこぼれ落ち、主人の頬を濡らした。

アスクルは激しく腰を突き入れながら、両手を重なる主従の胸の間に挿し入れる。みっちり重なると、乳肉の間を掻き分けて、密着している二人の乳首を探りあてると、いっしょに握りしめた。

「ひうっ！」

「ふああっ！」

右手の中にリージャと左乳首とエルダの右乳首をつかみ、左手の内側にリージャの右乳首とエルダの左乳首を収める。

「リージャ様、エルダ様、そろって母乳を出してください」

両手の指を動かして、乳首同士を強くこすり合わせてやりながら、上下にしごきはじめる。今まで想像もしなかった刺激を受けて、二人の女騎士は一気に乳悦の高みに押し上げられた。

「きゃひいいいつ、わたしの乳首、おかしくなるう！ ひいいいつ、もミルク、出るわああっ！」

「くおおおおっ！ わたくしの乳首も狂ってしまいますうっ！ きひいいい！ 母乳、出ますうううっ！」

「すごい。お二人とも、ぼくの手の中で乳首がビクビク動いています。母乳が出るんですね！」
アスクルの問いに、リージャとエルダは声をそろえて答えた。

「ほおおおう、出る！ わたしのミルク、たくさん出るうううっ！」

「ひきいいいっ、出ます！ こんなことされたら、わたくしの母乳、止まらなくなっちゃう！」

上下に重なりあつて押しあいへしあいする乳肉の間から、四方へ白い液体が勢いよく広がった。主従の母乳が同時に噴出して、アスクルの指の間からあふれだし、乳肉のわずかな隙間から外へ飛び出したのだ。

「ひいっ、ほおおおうっ！ たまらないいいいっ！」

「あひいい、ふおああああつ！ 気持ちよすぎて、おかしくなるうっ！」

乳汁の放出がはじまると、少年はいよいよ力をこめて、執拗に乳首しごきを連続させる。両手の動きが乳肉に伝わり、ひしゃげた四つの乳房そのものがタプタプと大きく揺れて、右へ左へ、前へ後ろへ、乳液を止めどなくしぶかせた。

アスクルは懸命に二人同時搾乳を実行しながら、腰を引いて、エルダの膣から肉棒を抜いた。

「はあああ、アスクル君が抜けてしまう！ まだ、イッていないのにい！」

鮮血でどろどろに濡れた赤い亀頭を、間髪入れずに下で開いたままのリージャの膣へと挿入する。

「おおおう、アスクル君、また、わたしに入れてくれるのね、ふあああん！」

計算してのアスクルの動きではない。ただ二人の美女を同時に味わいたいという欲望が、少年を衝き動かしていた。リージャを突いた回数などわからない。勘で男根を引き抜き、また上のエルダの膣をえぐる。そしてまた適当に引き抜き、下のリージャを貫く。

「あああ、いいっ！ いやあ、行かないで！」

「たまらない、おおおん！ 抜いてはだめえ！」

勇猛果敢で鳴る二人の女騎士は、少年に突かれては感謝のよがり声を噴き上げ、抜かれては快楽の継続を訴える。その間にも搾乳は休まずにつづき、もはや二人合わせてどれほどの量の母乳を搾り出されたのかもわからない。三人の周囲には、白い水溜まりが大きく広がっている。

「リージャ様、エルダ様、ぼくも、もう出ます！ お二人に射精させていただきます！」

「出して！ わたしにいっぱい射精してえ！」

「お願い、わたくしにも精液を流しこんで！」

アスクルが射精したのは、エルダの膣の奥だった。

「うおおおっ、出るうううっ!!」

精液の奔流が、姫騎士団の副官の体内を打つ。

「ああおおおおおううっ！ イクっ！ 射精されて、イッチャうううっ!!」

絶頂の業火に焼かれて激しくのたうつエルダの尻から、精液を出している最中の亀頭が

抜かれた。アスクルは射精をつづけたまま、リージャの女の中へ亀頭を打ちこんだ。

二度目の精液で体内を押し流され、リージャも絶頂の高みへ飛翔する。

「イックうう！ また射精してもらって、わたし、イクのううううっ!!」

今までの搾乳の何倍もの勢いで、母乳が噴き荒れた。自身の乳汁放出の水圧に押されたかのように、エルダの身体がリージャから離れて、ミルクをまきちらしながら白い水たまりに転げ落ちた。

アスクルもリージャの股間から離れて、足下のミルク溜まりに裸の尻をついた。

その瞬間、新たな乳汁が滝のように三人に押し寄せた。いつの間にか隊列を崩して、からみあう三人をとりかこんでいた三十人の女騎士たちの乳首から、いつせいに触手が抜けたのだ。

アスクルが首輪の石に触れたわけではなく、リージャとエルダの最初の放乳と同じで、触手がひとりでに抜けたのだ。本来はバラバラの時間に抜けるはずだが、強烈な搾乳肉交を見せつけられて発情した胸が、同時に限界に達してしまった。

爆乳熟女が自分の胸を揉みたてながら、ミルクをリージャの乳房へ飛ばした。

「あうおおお、おっぱい、出るううう!!」

ひとりだけ黒いマントをはおる姫騎士団所属の猛乳魔道師が、自分の指をしゃぶりながら、母乳をエルダの股間に浴びせた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>